

短歌春秋

140号

目次 ● 2016年10月

秀歌を読もう

中川佐和子

特集 短歌大会対談

伊香保短歌大会

対談 佐佐木幸綱×佐伯裕子
作歌のための言葉の見つけ方

2

古今伝授の里 郡上市短歌大会

対談 穂村弘×斉藤斎藤
いま、なにを詠みますか

11

伊香保・郡上市・所沢市武蔵野・和倉温泉短歌大会の各賞

20

連載

万葉の紐を解く七

上野誠

22

短歌をたのしく ポイント【3】

花山多佳子

24

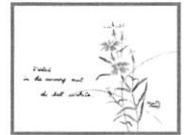
リレーエッセイ 琴と短歌

田中美智子

26

受講者作品

今月の表紙画



「撫子」

池田 松蓮

NHK 学園
俳画講座専任講師

撫子は優美なたたずまいから、別名を大和撫子。撫子に似た石竹は、茎が折れても伸びるほど強く、別名は唐撫子。鈴虫は月鈴子とも呼ばれ、松虫といっていた時代もあるそうです。スペイン語の先生曰く「オモシロイ」。朝露のたちこめてきて月鈴子

受講者のうた……裏表紙

秀歌鑑賞

飛鳥游美

28

誌上添削(入門/実作・実作集中添削)

田中 槐・平山公一

30

ご案内

秋の誌上短歌大会のご案内

44

学習の旅のお誘い

47

NHK全国短歌大会のご案内

48

●選者・講師の新歌集

中川佐和子

34

●歌だより

安部洋子

36

●受講者の歌集

牛山ゆう子

37

●短歌質問箱

松尾祥子

38

●NHK短歌

39

●受講者のみなさまへ

40

●あなたの声

42

●「学習の旅」の報告

43

作歌のための言葉の見つけ方

佐佐木幸綱×佐伯裕子

多様な推敲の仕方

まず、佐佐木さんがお選びになった一首目から、お話をうかがいたいと思います。

佐佐木 佐佐木信綱という、私の祖父にあたる人の歌です。関西のほうではこの歌に節がついていて、バスガイドの人が歌ったりしますので、ご存知の方があられるかもしれません。

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上な
る一ひらの雲

『新月』

「の」がたくさんあって、全部、上から下にかかっている。文法的に言うとは独特の形をしている歌ですが、これがとても有名になって

佐佐木信綱の代表作と言われています。みなさん方、歌を作る時に、推敲と言いますけれど、「ゆく秋は春にしたほうがいいかな」とか、いろいろ考えながら部分的に言葉を変えたりすることがありますよね。島木赤彦の推敲の跡を見たことがあるのですが、四百字詰め

の原稿用紙の真ん中に一首書いてある。そこから線を延ばして、ここはこういうふうに直す、ここはこうと、歌は一首なんだけれど直したところをまた直して、四百字詰め

の原稿用紙が真っ黒になるくらい直している歌もあるんです。

「ゆく秋の」の歌は、信綱は「あつというまにできちゃった」と自分で言っていました。全然推敲しなかったと。そういう場合があっ

て、育ちのいい子どもみたいに、全然いじらずにのびのびしていて、それがいい場合があるんです。もう一つは、島木赤彦の例を言いましたけれど、徹底的に直して、直して、そのことによって良くなる場合もある。

たとえば、斎藤茂吉のお弟子さんに佐藤佐太郎という人がいて、彼が斎藤茂吉に聞いたことを全部書き付けた『茂吉随文』というエッセイ集、聞き書き集のようなものがあります。そこで言っているのは、油絵は前に描いたものを消さないで、何度も何度も上に塗るわけで、ルネッサンス期の絵が四百数十年経つと剥けてくる。そうすると、剥けてきたところに味わいが出てきて、また良くなる。つまり、徹底的に推敲をやると、それが良さ

になる場合もあり、ぱっとできた育ちのいい歌もあり、その両方あるんだと。

佐伯 私は、和泉式部の歌が好きで、中でもこの歌が特に好きなんです。

かき曇る中空にのみ降る雪は人目も草もかれがれにして 『和泉式部集』

和泉式部っているいろいろな人と恋をして、相手が亡くなったり、また別れたりしているんですけれど、決定的に自分から別れを言わない生涯だったと私は思っています。与謝野晶子が、「想定すると相手の男の人は二十人くらいじゃないか」とさりげなく書いているくらい、相手がいたんですね。それが「人目も草もかれがれにして」と。「かれがれ」は離れて離れて散り散りで、しかも草が枯れるということも掛けているのだろうと思えます。中空に降っている細かい点々とした雪というのは、いろいろなことを噂する人目も、それからそこら辺に生えている草も全部切れ切れにしてしまって、人生なんてこんな中途半端なものなんだと。

この歌に「人目も」という言葉ひとつな

かったらどうだろう。これがないと、普通の、単なる叙景歌のようになる。しかし「人目も」で、この人の生涯の人の愛し方、自分の立場と人間の目つき、視線の関係がよく出ているなど思いました。

佐佐木 この歌、難しいんですね。「人目もかれる」っていうのは、私のことを誰も注目してくれなくなっちゃったと、そういうことでしょう。違う？

佐伯 私は雪がわあっと降っていると、人目もこちらに届かないような状態になっているとつたんです。人生つてはつきり見えななんだ、みたいな感じで読みました。

言葉を足すか削るか

佐伯 推敲の話で思い出したのですが、私の先生である近藤芳美は、ものすごく推敲しました。晩年の頃は、二三百字詰めの一冊を一首

で全部つぶしているのですね。分り易い歌だったのが、最後、完成した時にはわけがわからないくらい難しくしてある。あれは歌を壊しているんだと思いました。佐佐木さんはどうなんですか？

佐佐木 ちゃんと推敲しますよ(笑)。

近藤さんは九十代まで生きられたけれど、七十くらいから歌がものすごくわかりにくくなるんですね。それは多分、推敲をして直す時に人に分り易くするんじゃないかと、むしろ、「こういうふうにはわかつちやうと困るな」と、つまり、自分の歌が一通りしか意味がないと残念だと思っんです。意味って一通りじゃないでしょう。こうも読めるしこうとも読めるといふような、重層的になっている、そういう歌の作りにしたいと思って、近藤さんは直されたんだと思います。

佐伯 私たちには「わかり易く作れ」「それじゃあわからん」と言うんですけれど、ご自身の歌は本当にわかりにくかったですね。「人生つて、生きれば生きるほど荒涼として

いるんだ。それを表したいんだよ」ということをおっしゃっていました。

佐佐木 簡単に言っちゃうと、意味はわかりにくくなるんですね。今「荒涼とした」ということが出ましたが、言葉の肌触りみたいなもので勝負したくなるんです。言葉には意味だけではない。音楽があるでしょう、それからイメージがあるでしょう。つまり、音楽と



イメージと意味があつて、普段喋っているときは意味を重視して通じればいいやとね。だけど歌の場合は意味なんか通じなくても音楽がいいや、と。若山牧水などには、しばしばそういう歌があります。意味はどうってことないんだけど、なんとなく口ずさんでいるといい気持ちになるような、音楽がいいという、そういう歌の作りもあります。あとは感触。歌の手触りがざらざらしているとか、イメージが荒涼としているとか、そういうふうにもできる。そのあたりのことを、どこで勝負するかということで、近藤さんくらいになると考えてやられたんだと思います。

佐伯 言葉を省略したり省くことで、リズム

が柔らかくなって単純化されていくということとを、カルチャーなどではすすめています。でも自分の歌を振り返ると、ぎつしりと詰まった感じになっちゃうんです。

推敲する時に、言葉を省略するのか足すのか、近藤さんは足していたような気がします。

打ち消すことで表す

佐佐木 築地正子の『花綵列島』の中の歌。花綵列島というのは日本の別名です。

露ながら紫陽花一枝挿したれば方壺の
口のうたはずなりぬ 『花綵列島』

露に濡れた紫陽花を四角い壺に挿した、それなら壺が歌わなくなった、と。言葉というのは不思議なことがあつて、打ち消すことによって表すことができる。「うたはずなりぬ」、歌わなくなったというのは、「それまでは歌っていたよ」という意味になりますよね。四角い壺の口はずつと歌を歌っていた。不満の歌だったのかどうかはわからないけれど、

ど、紫陽花を挿したら、もう満足したのか全然歌わなくなった、という意味ですね。何が言いたいのかというと、打ち消すことによって表す。「歌わなくなった」と言うことで、昨日まで歌っていたということを言っている。

佐伯 どうして歌わなくなったのかと言えば、塞がれたからでしょうか？

佐佐木 それはわからないんだよね。

佐伯 ここにすごい省略があるんですね。

佐佐木 そう思います。

佐伯 「露ながら」ということで、瑞々しい紫陽花の感じが出ています。とても上手な方で、洪いですが。私は大好きです。

佐佐木 こういうのを上手い歌というんでしょうね。とてもよく構築されている。

佐伯さんは、啄木の歌を引いていますが、啄木はどうですか？

佐伯 啄木のことは、最初あまり好きではなかったんですが。

かなしみの強よくいたらぬさびしさよ
わが児このからだ冷ひえてゆけども

『一握の砂』



この歌がすごく印象的で、いつのまにか本当に好きになりました。ほんの一瞬の自分の心理をよく捉えた、近代的、現代的な歌だなと。冷静に、自分の感情の端々をバシッと捉えている。この繊細さと鋭さとクールさは、いいなと思う。それは、ものを表現する時にものすごく大事なことじゃないかと。

佐佐木 あんまり悲しまない自分が寂しいという歌でしょう？

佐伯 そうですね。そんなことを歌にしているのか、というような感じが世間にはあったのじゃないかと思うんです。それを、自分に忠実に詠ったところがすごいなと。

佐佐木 これは普遍的な悲しみで、こういう

ことはあるんじゃないかな。

佐伯 この感じというのは、啄木の前に歌になっていくんでしょうか？

佐佐木 どうでしょうかね。

佐伯 私は、歌で言葉にしたのはこれが初めかなと思っています。切り口の新鮮さという角度から見ると、なんでもない日常の心理の切り口の良さを啄木の歌に感じるようになりました。

佐佐木 僕はね、意味よりも「からだ」という言葉が出てくるところが新しかったし、歌としていいんじゃないかと思った。「息がどう」とか「目がどう」とかいくんじゃなくて「からだ」という言葉がここではうまくいったんじゃないかという気がします。

佐伯 「わが児のからだ冷えてゆけども」で、上句が生きた歌ですね。

映像的な短歌

佐佐木 歌を作る時、みんなわりと考えているのが、映像と言葉との関係ですよ。特に昭和以降は目の世界を重視して、映画などができますよね。斎藤茂吉なども映画の歌をた

くさん作ります。映像を、どう言葉化するかということ、何か独特なやり方があるのかなと、僕は興味を持っているところです。時田則夫の歌です。

汗のシャツを枝に吊してかえりきしわれにふたりの子がぶらさがる

『北方論』

この歌も映像的でしょう？ 枝にシャツがぶら下がっているのと、自分の腕に子どもがぶら下がっている、上のイメージと下のイメージが映像的に重なり合うんですね。映像で勝負している。心を詠うとか感情を詠うとかではなくて、映像を言葉化する時のその手触りというか、手つきが面白いという、そういう類の歌が増えてきているんじゃないでしょうか。

佐伯 そうですね。その時に省略された比喻で映像が二重になっていたりします。この歌も帰るまでの時間が省略されている。映像が二重映しになるように、短い短歌の中でなされています。

佐佐木 わかりやすい。

佐伯 先ほど佐佐木さんは、まず、推敲をどうするかということ、短歌や言葉というのは否定したら否定した裏側に何か立ち上がってくるものがあるんだということ、今のお話のように、イメージや映像を重ねたり引いたりして歌を作るんだということ、この三つの命題を出されました。私のほうは、人生とか心理とかそういうものの切り口、意味的なことです。

佐佐木さんご自身が歌を作られる時にいちばん気にしていらいっしやることを、ちょっとうかがいたいなと思います。歌ができる時って、どこかに行ったり見たりとか、そういうことですか？

佐佐木 それはケースバイケースじゃないかな。旅行に行つて何かを見て、何かに出会つて歌を作る場合もあるし、そうじゃない場合もありますよね。

近・現代の題詠

佐伯 初心の方の質問に「言葉が出ない」とか「歌が全然できない」というものがとても多いです。でも、題を出すと、みんなよくで

きるんです。題詠がどういうものか、私自身、伝統的なことはよくわからないんですけど、何かひとつ言葉があると、そのまわりに言葉が派生して歌がでやすいのかなと思っています。

佐佐木 題詠は古典の世界でずっと続いていましたが、明治三十年代に題詠が否定されました。題詠というのは何かというと、「私」のことを詠わないという約束なんです。それが明治三十年代になって、私のことを詠っていないんだということになって、題詠はやめようよということ、題詠が全然なくなっちゃうわけです。それが、一九七〇年代の終わりにわらになつて「心の花」で題詠をやり始めたんです。その頃、僕が「NHK短歌」に出るようになりまして、俳句は季語が題になります、短歌も題を出しちゃおうと。最初は「今頃題詠じゃないだろう」とずいぶん文句を言われましたが題があつたほうが作りやすいですからね。

題つていうのは何かと言えば、みんな同じ土俵に上ろうよということ。昔は歌合せというのがあつて、左方と右方が勝負をするわけですが、同じ土俵でないと勝負はで

きないので、土俵を作っておいて、そこに両方が乗ってくれば勝負が見やすい。そこで、同じ題で歌を作るということをやり始めたんです。その時に、公の土俵の上であんまり自分のことばかり言ったのでは具合が悪いので、土俵に上る時は客観的な公のものであつて、プライベートなものではない。そういうことで、題詠では私的なことは詠わないというルールがあつた。それが昔のやり方です。

佐伯 なんとかして自分を離れ、もつとおおらかなところで表現できないだろうかということがずっと続いてきた。それが明治になつて変わった、そういうことですね。

佐佐木 自分で自分に題を科して、今日は壺の歌を作ろうとか、そうやっている方もおられるんじゃないでしょうか。日記みたいな歌も作るけれども、壺の歌も作る。

佐伯 私は少女期から「私、私、私」と思いつめていたので、早く私から離れたいと思つてはいたのですが、題で作つてもやつぱり「私」なんです。題詠というのは、私から離れることが基本だということをお聞きして、すごく新鮮な感じがありました。

佐佐木 もうひとつは「題詠論」。昔は題詠

が中心でしたから、題詠論がたくさんある。僕は「短歌名言辞典」という本を作りましたけれど、その中でも、昔の人の「題はこうあるべきである」といった論がずっと出ています。題は大事なものだから、まず神棚に上げて、その前で三拝九拝して題のことだけ考えろと。そして、その題を詠った先輩の歌を徹底的に研究しろと。例えば「壺」だったら、昔からの壺の歌を自分で探すわけだよね。そして本意と書いて「ほい」と読みますけれど、題の本質はなんなのか、和歌史における壺とはなんだったのか、そういうことを、先輩の歌を勉強することで知っていく。そして歌を作っていくことをやったんです。つまり、題が出ると、先輩の歌を見て、そのことによって伝統を知っていく。そのために題があつたんですね。「類題歌集」というのもあります。「壺」という言葉で引ける辞典で、歳時記のものになつているものです。

言葉で歌が引ける歳時記のようなものが、今はたくさん出ていますから、たくさん歌を知ることによつて、自分を離れる。あるいは、普段の自分の歌の作り方から、もう一段

先の歌の作り方をやっていく。そういうことをなさるといいと思います。現代短歌の人たちがまだやっていない、我々がやっていないやり方というのは、まだまだあるはずですよ。佐伯 岡本かの子は、長いこと自分を離れられないタイプの作家でした(笑)。自分を離れられなくて自分のことを思いつめるがゆえに何かを踏み越えて、かえつて自分から離れちゃうところですけど、私は岡本かの子のそこをすごいなと思った。

蝶族の翼の張りのゆたけさや季はたけなはの夏に入りつつ
「歌日記」

力強い、明朗な感じですよ。最近の若い人の歌——自分もそうなのですが——、力強さとか明朗さ、日本人がもともと持っていた感情の中に太くあつたものがなくなっている感じがするんです。かの子は非常にわがままな人で恋愛もそうでしたけれど、晩年にいくほど、屈折感や暗くても明朗さが力強くあります。「蝶族の翼の張りの」は、怪獣映画に出てくるモスラのような蝶しか思い浮かばない。そういうものの捉え方、自分を離れていく感

じがして、明朗さが持っている強さというところで選びました。

佐佐木 「蝶族の翼の張りのゆたけさや」まではとつても上手だよ。ただ、次の「季は」っていうのはよくないんじゃない？

佐伯 ああ、ここがね。

佐佐木 素人っぽいよね(笑)。特にこの「は」がよくない。たとえば「蝶族の翼の張りのゆたけさや季節たけなは(の?)」夏に入りつつ」と、この「は」は取りたいよね。

佐伯 そうですね、かの子さんに聞こえたらいいんだけど(笑)。

佐佐木 会つたら言つておいてください。

佐伯 上句の「蝶族の翼の張りのゆたけさや」で、「うわあ、夏だ!」という感じがします。一緒に生きていく、蝶々やら何やらと自分は一緒なんだという感じがしていいなと思つて。

言葉のリズム、勢い

佐佐木 言葉の力、さつき、音楽の話をしましたけれど、僕が選んだ渡辺松男の歌はそうですね。

春さむき大空へ太き根のごとく公孫樹
の一枝一枝のちから 【寒氣氾濫】

芽吹き前の、裸木であるような公孫樹を、
「一枝一枝のちから」と詠っている。これも
言葉の力というのかな、言葉の張り。

佐伯 張りですね。

佐佐木 内容的なことがどうというものではないが、音楽的などころが面白い、そういう歌ですね。

ついでだから言いますが、次の僕の歌も言葉の張りみたいなもので勝負している歌なんです。

空より見る一万年の多摩川の金剛力よ、
一万の春 【アニメ】

羽田から飛行機に乗るでしょう。富山とか新潟とか日本海側へ向かうと、羽田からしばらくの間、下に多摩川がずっと見える。遡っていくかたちになるんですね。それを上空から見てみると、昔、多摩川が暴れ川だったということがわかります。何百メートルの範囲

で、百年間はこっち側、次の三百年はここに
行つてと、多摩川が何百年、何千年単位で暴
れていたということが空から見えるんです。

お前は一万年単位で頑張つてのたうち回つて
いたんだよね、と多摩川に言っている、そう
いう歌。

佐伯 結句がいいですね。「一万年」だから
「一万の春」ってことですよ。

佐佐木 これも、言葉の張りみたいなもので
しょう。

佐伯 明朗な力強さ、言葉の力の張りという
ことで、私が選んだ河野裕子さんの歌があり
ます。

若葉らの熱きは噎ぶばかりにてこの山
食ひたし食はれてもよし 【はやりを】

大振りの歌です。どこか暗さもあるんです
が、この濃厚な生命力と言葉の張り、それと
明朗な力強さ。毎年五月くらいになるとこの
歌を思い出します。

青山を見ているとなんとなく青い葉つ葉を
思い出して、あれを茹でたら美味しいだろう
な、どんな器に盛ろうか等々を全部省略して

「この山食ひたし」とやってみたら、「あの山
だったら食われてもいい」と思ったんじゃない
か。山と一体になったすごいものを感じた歌でした。

佐佐木 「食はれてもよし」というのは、山
に私が食われちゃうの？

佐伯 私はそうとりました。

佐佐木 山が食いつくのか(笑)。「食はれて
もよし」は山が言っているというふうにした
ほうがいいんじゃないかな。言葉の勢いでそ
うなつたという理解のほうがいいかもしれま
せんね。山が人を食うというイメージは、ま
たちよつと別かなという感じが、僕はしま
す。これも、言葉のリズム、言葉の張り、勢
い、そういうものですよ。

声に出して歌を読む

佐佐木 僕は若い頃、河出書房というところ
で編集をやっていて、毎月、原稿をもらいに
大江健三郎さんの家に行くのですが、たい
いまだ書けていないんだよね。「あと二時間
ばかり待っていてください」ということにな
り、待っていると大江さんは書けたところま

で何度も何度も口に出している。

佐伯 声に出しているのですね。

佐佐木 書けたところまで口に出して、その勢いでその先にいききたいんだよね。歌もそうでしょう？ 例えば五七五までできていて、それを何度も何度も繰り返すことで、七七がぱつと出る場合がある。意味で出るのではなくて、言葉の力ですよ。言葉が他の言葉を招き寄せるのだと思います。俺が全部作ろうと思うと、俺より小さいのしかできないでしょう。全部自分で作つたらだめなんです。何かの力を借りなくちゃならない。そのうち、一番大事な力は言葉の力です。人間は百年しか生きられないけれど、言葉は何千年も生きています。その言葉の力を借りる時に、何度も何度も発音して、発音したそこまでの言葉の流れの力で次のものを招き寄せる。いつもそうできるわけではないですが、そういうことがある。

佐伯 作っている時に、思わず声に出すということもありますね、自分で。

佐佐木 それを始終やるのがいいと思うんだ。僕が学生時代、初めて小型録音機ができて、大喜びで自分の歌を録音したりね。

佐伯 それを聞くんですか？

佐佐木 聞くんです。そういうことをやってきたから、舞台上で自分の短歌を読んだりギターの人と一緒にやったり、レコードも出しました。音楽としての歌というものを大事にする。それによって言葉の力をなんとか味方にして、自分より大きな短歌を作りたいという、そういうモチーフですね。

佐伯 私は喫茶店とか電車の中で作ったりするから、そこで声に出したら、変なおばさんになっちゃう！ やっぱ、声を出す時は声を出せる場所で作らないと、ですね。

佐佐木 「言う」ということだけを強調して言いましたけれど、なぜ短歌形式で詩を書くのかということ。短歌形式は千四百年は生きている。その形式を信じて、形式の力によって自分以上の自分を引き出してもらおう。それが短歌を作る意味でしょう。それを、もうちょっと増幅すると、声に出すということになるわけです。

佐伯 自分を越えたものというのは、繰り返しておっしゃっていることの一つですね。それに関わる歌はありますか？

句切れと言葉選びを

佐佐木 どうやって言葉を探すかということ、栗木京子さんの歌を見てください。

十月の跳び箱すがし走り来て少女
らばつと脚ひらく
『綺羅』

これはユーモアの歌ですね。「ばつと脚ひらく」の「ばつと」のところ。擬音語、擬態語、オノマトベ、あるいはオノマトピアというふうにありますね。こういうものは下品だから、古典和歌にはないわけではないけれど非常に少ない。擬音、擬態語というのは口語的です。俳句はやるんですね。芭蕉にもたくさんあります。「梅が香にのつと日の出る山路哉」とか、僕が大好きなのが「雪とけてくりくりしたる月夜かな」。真冬の雪がとけてきて空気が澄んでいる時、月が出てきた。それが「くりくり」している。お月様がくりくりしているって、とてもいい。

佐伯 いいですね。

佐佐木 そういう句が俳句にはいっぱいあり

